

保護者の方からのメッセージ ～小学部低学年編～

今回は、本校の小学部低学年の保護者の方2名から、メッセージを寄稿いただきました。

「体験入学を通して」

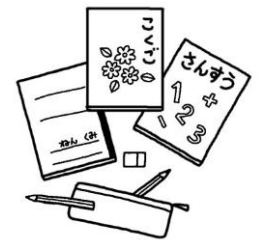
昨年6月、息子が日本の小学校へ初めて体験入学しました。2週間強という短い期間でしたが、息子にとってはもちろん、親にとっても、大変有意義な体験となりました。

ボストン日本語学校の幼稚部へ入園した当初は、教室を出ようとする私達を泣きながら引きとめていた息子。そんな我が子が、体験入学2日目にして「ひとりで行ける。」と校門口で私に手を振り、たくさんの子供達の輪の中へ走り去って行きました。体験入学期間中、そんな風に息子の成長ぶりを実感する機会を何度も得ることができ、約4年通ってきた日本語学校の影響力を感じました。



再認識できたこともありました。ちょうどその小学校では、日本語学校と同じ国語の教科書内の同じ単元を学んでいました。ほとんど毎日、国語と算数の授業が時間割に組み込まれていて、1つの単元の学習に1週間はかけていました。一方日本語学校では、1つの単元に多くかけられても2週。学校も年間40回ほどしかありません。そんな厳しい日程の中でも、日本の子供達が学ぶのとほぼ同じ内容をしっかり網羅してくれていることに、改めて気が付きました。

現実の日常では、日本語学校や現地校の宿題、放課後や週末の習い事に余暇の時間などの狭間で、親子共に日々をこなしていく事だけに追われてしまいがちです。が、今年の体験入学が、これらの日々の積み重ねが肥やしとなり、息子をよりたくましく成長させてくれているんだということを証明してくれたようで、親にとっても今でもよい励みとなっています。



「子供達と一緒に通った日本語学校」

初めて日本語学校に足を踏み入れた時、カフェテリアで待機している保護者の数には圧倒された。噂に聞いていた通りの宿題の多さを現実に見て、なんだか嫌な予感がした2年前の4月。

そしてもうすぐ丸2年が過ぎる。学期ごとの区切りがあるたびに“今度こそはやめさせよう”と何度思った事か。元々、子供たちをここボストン日本語学校に入学させる事は、私ではなく非日本人である主人の希望だった。しかし宿題を見るのもさせるのも“する”のも勿論、すべて日本人である私の役目。私が嫌々彼らの宿題を“している”のだから、子供たちも嫌々登校する有様。ただ面白いのは、朝あれほどダダをこねながらも、クラスメートとも、先生とも楽しい時間を過ごしているようなのだ。学校が終わって家に帰ると、私にその日の“面白かった事”を報告したり、彼らなりに学んだと思われる日本語を使って兄弟間で使ったりしている。



現在生徒数が700人を超えるというこの学校で、いずれは日本に戻らなければならない生徒もかなりいるだろう。そして、我が家のように、日本に戻る選択肢はほぼない生徒も数多くいるだろう。日本語を学びたい、勉強したいという自分の意志で通っている生徒は一体どのくらいいるのだろう。「日本語を『親の言う通りに』勉強しておいてよかった」と、そう遠くはない将来に思う生徒はどのくらいいるのだろう。2年間過ごしてみて、未だに先の見えないトンネルの中でさまよっている気分である。

そのトンネルの中で転びそうになった時に、それを防いでくれたのが子供たちの担任の先生であった。助けなければいけない生徒の数がどれほど多くても、必ず手を差し伸べて下さった。学校でお会いするたびに、

“太郎君は本当に良く頑張っていますよ”という言葉にどれだけ励まされたであろう。今日までくる事が出来たのは、この先生たちのおかげである。本当にどうも有り難うございました。宿題をきちんとしなくて申し訳ありませんでした。(笑)

この学校で時間を過ごす事が出来るのも残りわずか。我が家も間もなく引っ越しである。新しい場所で子供たちが日本語を続けられる環境であるかどうかはわからないが、彼らには“あの日本語学校では先生や仲間と楽しかった。日本語も少しだけ学んだ”という事をずっと覚えていて欲しいと思う

